

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

現代日本語のヴォイスに関する研究—中国語との対照を交えて—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-09-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2290">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2290</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 李藝氏の博士学位申請論文審査結果

### 論文要旨

この論文は、現代日本語のヴォイスについて、非情物主格受動文を中心に、中国語との対照も視野に入れつつ論じたものである。まずヴォイスとは何かという問いから入り、ヴォイスの形式を厳密に規定したうえで、現代日本語の受動態を対象として、行為者標示の方法を手掛かりに考察している。さらに、中国語との対照に移って、中国語受動文の分類を明確にし、特徴的な構造を分析するなかで、それぞれの問題点を検討している。

本論文は序章とそれに続く第二章から第七章により構成される。序章では研究の背景、方法、意義等が示される。第二章では、日本語と中国語のヴォイスが統語論的に規定され、日本語のヴォイスは元の動詞のガ格を規則的に他の格に置き換える形式、中国語のヴォイスは動作主体と対象の位置関係を体系的に変更する形式ととらえられる。第三章および第五章では、日本語の行為者ニ標示受動文が、項目間の共感度関係に基づく文法現象、すなわち話者の主格項寄りの視点に基づく現象として統一的に説明され、第六章では主格項寄り視点の端的な場合が行為者の不標示と解釈される。特に、非情物主格受動文において有情行為者がニで標示される場合、すなわちヒトよりモノあるいはコトの方に話者が視点を寄せる場合の要因として、話者自身でもありうる受影者の潜在、行為者の非特定、従属節における主節の主格と一致した主格が指摘される。第四章では、日本語の行為者ニヨッテ標示受動文は、視点に基づく現象ではなく、行為者に情報の焦点を置くための表現であると主張する。以上の議論の根拠となるものは、主に名詞の指示特性と動詞の意味特徴である。第七章では、中国語の有標受動文の分類について考察し、“被”受動文を中心に日本語との相違点と共通点を観察している。

### 論文審査結果

日本語文法論では「(読 m)-<sup>ま</sup>a れ (る)」「(見) られ (る)」「(さ) れ (る)」がヴォイスの形式と広く認められているのと同時に、いわゆる有対自動詞と有対他動詞の語彙的な対立も一種のヴォイスと見なされる場合がしばしばある。他方、中国語文法論ではヴォイスという文法範疇を認めることは必ずしも一般的ではない。本論文の第二章では、統語論的な立場から、日本語の「-a れ-~<sup>ま</sup>-られ-~<sup>ま</sup>-れ-」および中国語の「被」「叫」「讓」「給」のみを受動というヴォイスの形式と規定しており、明快である。ただ、今後の発展という観点からは、日本語の受動以外のヴォイス、あるいは中国語の“把”構文なども考察の視野に入れる必要があろう。

日本語において、非情物すなわちモノあるいはコトを主格に置き、行為者をニで標示する受動文は、一般に不自然とされるにもかかわらず、実際には適格となっている例が少なくない。この現象について、これまで「潜在受影者」「属性叙述受動文」「叙景文」等、さまざまな概念を用いた説明が試みられてきた。本論文の第三章、第五章、第六章では、行為者ニ標示受動文を、話者が主格項寄りの視点をとっていることの現れと統一的に把握し、従来の諸概念を、話者に主格項寄り視点をとらせる要因の下に収めている。想定される「潜在受影者」は、受動文の非情物主格の持主あるいはそれに準ずるヒトとは限らず、話者自身の場合もあるということ、「属性叙述受動文」には、非情物主格が特定で視点を寄せ易く、

行為者が非特定で視点を寄せにくい例が多いということ、非特定で視点を寄せにくい行為者は標示されない方が自然な場合もあるということなど、高度な一般化を目指す指摘がなされている。また、非情物主格・行為者ニ標示受動文のなかには、本論文の観察に従えば、行為の結果の状態に行為者自身が関わっていて、行為者が場所を兼ねているものがある。本論文はそのような種類の受動文を再帰的受動文と呼び、当該の現象を扱った先行研究よりも精密な分析を行っている。

近代以降の日本語には、非情物を主格に置き、行為者をニヨッテで標示する受動文が見られる。本論文の第四章では、行為者ニヨッテ標示受動文を、行為者ニ標示受動文のような視点の表現ではなく、行為者に情報の焦点を置くための表現であるとしている。ニヨッテは原因の表現に由来し、そのことは、具体的な行為の結果を伴わない動詞が行為者ニヨッテ標示受動文をとらない理由を説明する。また、創造動詞の場合、行為の前には対象が存在しないため、対象に視点を寄せることはできないが、これは創造動詞が行為者ニ標示受動文をとらず、ニヨッテ標示受動文のみをとりうることに整合的である。一方で、行為者ニヨッテ標示受動文における焦点の、さまざまな文脈に照らした検証は十分とはいえない。また、この章の位置は論文構成上適切でない。

本論文の第七章では、日本語との対照研究の立場から、中国語の“被”受動文を総合的に観察している。その結果、“被”受動文が行為の影響を明示するための表現であること、中国語にも「間接受動文」と呼ぶべき種類の“被”受動文が認められること、新用法として日本語の「属性叙述受動文」に相当する“被”受動文が現れていることなどが指摘され、中国語文法論に対して有意義と考えられる。さらに、中国語においても創造動詞が“被”受動文をとらないことから、日本語における「視点」と「受影性」との関係について、興味深い問題を提起している。

ヴォイスは、客観的には同一とされる事態の、話者による異なるとらえ方を反映する文法範疇である。本論文は、日本語と中国語という個別言語を取り上げつつ、「影響」「視点」「文法化」といったヴォイスの本質に関わる議論を展開したものであり、一般言語学的にも評価できる。

## 最終公開試験結果

最終公開試験は、2017年7月7日午後6時より本学三木記念会館にて実施され、中井幸比古教授、下地早智子教授、福田嘉一郎（主査）の3名の本学教員に、麗澤大学の井上優教授を加えた、計4名が審査に当たった。まず学位申請者が論文要旨を発表し、続いて各審査委員が総評を述べ、申請者との質疑応答に移った。

下地審査委員からは、先行研究の把握が適切で、新しい指摘が多いとの評価を受けたが、中国語の“被”構文が視点の表現であるか否かについては更なる考察を要するという意見もあった。井上審査委員からは、本論文で扱われているのは実質的に受動文のみであり、ヴォイス全般について論じるかのような題名はふさわしくない、また、説明のための概念が多く示され、互いの関係が分かりにくく、整理が必要であると指摘された。さらに、下地、井上両委員から、中国語統語論において“把”構文をヴォイスから外すことには根拠が乏しいという意見が述べられ、その他、日本語の例文の解釈について不適切な箇所の指摘があった。中井審査委員からは、例文を選んだ基準が不明確、本論文の結論は受動文あ

るいはニヨッテという形式の歴史に関わる知識と合致するのか等の意見，質問が出た。申請者は各審査委員からの発言に対して率直，誠実に回答した。

公開試験終了後，論文および質疑応答の内容に関する審議が行われ，李藝氏の博士学位申請論文が合格の水準に達していることが，すべての審査委員に承認された。